

第五部 新しい出エジプトと、主のしもべ 40～53章

緒論 2, 3 で詳しく述べたように、40 章以下は、批評家たちが第二イザヤあるいは第三イザヤに帰する箇所である。本注解では、アモツの子イザヤが公生涯から姿を消す前 680 年頃の預言と考える。第二イザヤ説、第三イザヤ説では、55 章を境にして後半を分けるが、48、57、66 章のそれぞれの最後に「呪いのことば」があるので、これを 3 つに分ける注解者もいる。本注解では 53 章を境にする。それは、53 章がそれまでの頂点だからである。また、しもべ (⌘ エベド) が、53 章まで単数で用いられ、54 章以下では複数となり、主のしもべの働きによって救われ神の礼拝者となった新しいイスラエルを指していることも、一つの指標である。もちろん、53 章と 54 章が、全く切れるというわけではない。40 章以下の区分の仕方は、前半と違って各章ごとに取り上げ、それを更に小区分に分ける。

40章 全能の神によるシオンの救い

a. 序曲、慰めのメッセージ(40 : 1-11)

1節 「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」と
あなたがたの神は仰せられる。

נְחַמוּ נְחַמוּ עַמִּי יֹאמַר אֱלֹהֵיכֶם: ^{WTT} Isaiah 40:1

2節 「エルサレムに優しく語りかけよ。
これに呼びかけよ。
この労苦は終わり、その咎は償われた。
そのすべての罪に引き替え、
2 倍のものを主の手から受けたと。」

דַּבְּרוּ עַל-לֵב יְרוּשָׁלַם וְקְרְאוּ אֵלַיָּה כִּי ^{WTT} Isaiah 40:2

מִלֵּאָה צְבָאָה כִּי נִרְצָה עֲוֹנָהּ כִּי לִקְחָהּ מִיַּד יְהוָה כַּפְּלִים

בְּכָל-חַטָּאתֶיהָ: ׀

40 章は、慰めよ。慰めよ によって始まる。39 章がバビロン捕囚の預言で閉じられるのと対照的である。もちろん、ここではまだバビロン捕囚は起こっていない。しかし今や「心をかたくなにするメッセージ」(6:9,10)を伝え続ける時は終わった。イザヤは「慰めのメッセージ」を伝えるようにと命じられる。慰めよ は、複数命令形であって、イザヤはいわば、彼に続く預言者たちと共に神の命令を聞いたような形になっている。繰返しは、イザヤ書全体を通じての特徴である(24 : 16、26 : 3「全き平安」、29 : 1、38 : 11、17、19、

43 : 11、25、48 : 11、15、51 : 8、12、17、52 : 1、11、57 : 6、14、19、62 : 10、65 : 1)。慰めの対象は わたしの民 である。神は今や、彼らのご自分の選んだ民であることを明示される(6 : 9、10、8 : 6、11 等)。そして今度は、イザヤが民に向かって語りかける時、 あなたがたの神 と宣べるのである。

エルサレムに優しく語りかけ は、「エルサレムの心に語れ」。もしバビロン捕囚の民だけを想定するなら、エルサレム と呼びかけることはできないはずである。ここでは当然、「新しい都エルサレム」すなわち「シオン」とそこに住む民を指している。それゆえ、単にバビロン捕囚からの解放だけでなく、終末的な預言でもある(4:5、12 : 6、28 : 16 等)。

エルサレムに優しく語りかける ことのできる理由が、三つの接続詞[⊠]キーによって説明される。 その労苦は終わった こと、 その咎は償われた こと、 そのすべての罪に 対して、2倍のものを主の手から受けた こと。労苦 ([⊠]ツァーバー)は、旧約聖書では何百回も用いられるが、普通は「軍隊」の意味。特別な場合に、苦しみや悩みの時を指す(ヨブ 7 : 1、14 : 14 「苦役」)。エルサレムの労苦が何を指すかは、次の表現を併せて考えなければならない。咎 ([⊠]アーウォーン) 1 : 4 注解。償われた は、咎に対する犠牲のいけにえがささげられ、満足させられるという意味である(レビ 1 : 4、7 : 18、19 : 7、22 : 23、25、27)。ここには、53 章への伏線がすでに引かれていると見てよい。エルサレムが悩みの時を十分に持ったというだけでは、咎のための償いそのものにはならないからである。罪 ([⊠]ハッターズ) 1 : 4 注解。引き替え は、原文では前置詞のベースという一字だけで、「の中で」「のために」「において」「によって」といろいろに訳することができるが、罪 と 主の手から受けた ものが因果関係に理解されないように注意しなければならない。二倍 は、文字どおり2倍と考える必要はない。「十分に」という意味である。両様にとれることばであるが、エルサレムがその罪のために十分のさばきを受けて後、十分の祝福を受けるという風にとってもよい。いずれにしても、「心をかたくなにするメッセージ」の時は終わり、イザヤが「いつまでですか」と聞いた答えが(6 : 9-13)、慰めのメッセージによって終末の黙示の中に完全に成就している。

3節 荒野に呼ばれる者の声がする。

「主の道を整えよ。

荒地で、私たちの神のために、

大路を平らにせよ。

קוֹל קוֹרֵא בַּמִּדְבָּר פִּנּוּ דֶרֶךְ יְהוָה יִשְׂרָאֵל ^{WTT} Isaiah 40:3

בְּעֶרְבָה מְסֻלָּה לְאֱלֹהֵינוּ:

4節 すべての谷は埋め立てられ、

すべての山や丘は低くなる。

盛り上がった地は平地に、
険しい地は平野となる。

כָּל־גֵּיאַ יִנְשָׂא וְכָל־הַר וְגִבְעָה יִשְׁפָּלוּ וְהָיָה ^{WTT} Isaiah 40:4

הָעֵקֶב לְמִישׁוֹר וְהָרְכָסִים לְבִקְעָה:

5節 このようにして、主の栄光が現されると、
すべての者が共にこれを見る。
主の御口が語られたからだ。」

וְנִגְלָה כְבוֹד יְהוָה וְרָאוּ כָּל־בָּשָׂר יַחְדָּו כִּי פִי ^{WTT} Isaiah 40:5

יְהוָה דִּבֶּר: ׀

新約においては、この預言がバプテスマのヨハネにおいて成就したと解釈されている重要な語句であるが（マタ 3 : 3、マル 1 : 3、ルカ 3:4-6、ヨハ 1 : 23）イザヤはもともと何を言おうとしていたのであろうか。一般には、バビロン捕囚からの帰還を指すと考えられている。「この声はだれに向けられているか。信仰者に対してであらうか。そうではない。民を捕囚の状態に縛っているクロスに、ペルシャ人に、メディア人に対してである」（カルヴァン）。

イザヤの黙示は、1、2 節から突然他の局面へと展開し、一つの 声 が 呼ばわる のを聞いた。これがだれを指すのか、文法上も文脈上も決め手はない。荒野 は人間の惨めな状態を示すための比喩的表現。水のない所(41 : 18、43 : 19、20、48 : 21)、やせ地(41 : 19、51 : 3)、道のない所(43 : 19)、人の住まない所(64 : 10)である。荒地 (アラーバー) は、「乾いた地」を意味する。死海の西方の南ユダ(サム 23 : 24)や、ヨルダン川の流域(サム 2 : 29、4 : 7)を指す。それゆえ、特にバビロンからパレスチナへの荒地を通る道と考える必要はない。3、4 節に描かれている情景も、バビロン捕囚からの帰還のときに具体的に起こったわけではなく、詩的な表現である。栄光 (カーボード) 6 : 3 注解。主の栄光 が現れて、すべての者が共にこれを見る ことは、イザヤの時代には考えられないことであった。彼らは「心をかたくなにするメッセージ」によってさばきの下に置かれていたからである。しかし、イザヤ自身はそれを見(6 : 3-5、ヨハ 12 : 41)、将来自分だけでなく、すべての人が見る日の来ることを確信していたのである。それゆえここでも、単なるバビロン捕囚からの帰還を指しているのではない。

6節 「呼ばわれ」と言う者の声がする。
私は、
「何と呼ばわりましょう」と答えた。
「すべての人は草、
その栄光は、みな野の花のようだ。」

קוֹל אָמַר קָרָא וְאָמַר מִה אֶקְרָא כָּל-הַבָּשָׂר ^{WTT} Isaiah 40:6

חֲצִיר וְכָל-חֲסִדּוֹ כְּצִיץ הַשָּׂדֶה:

7節 主のいぶきがその上に吹くと、
草は枯れ、花はしぼむ。
まことに、民は草だ。

יָבֵשׁ חֲצִיר נִבֵּל צִיץ כִּי רוּחַ יְהוָה נֹשְׁבָה בּוֹ ^{WTT} Isaiah 40:7

אֲכֵן חֲצִיר הָעָם:

8節 草は枯れ、花はしぼむ。
だが、私たちの神のことは永遠に立つ。」

יָבֵשׁ חֲצִיר נִבֵּל צִיץ וְדִבְרֵ-אֱלֹהֵינוּ יִקּוּם ^{WTT} Isaiah 40:8

לְעוֹלָם: ס

再び 声 がする(3)。私は (6)は、ヘブル語原文では「彼は」。新改訳は 70 人訳によっている(欄外注)。 何と呼ばわりましょう は、イザヤの召命体験と宣教命令の形に非常によく似ている。それゆえ、この答えはイザヤによって発せられたととるとよい。この箇所での宣教内容は、1、2 節の罪の赦しのメッセージ、3-5 節の自然の変容のたとえによる、主の道を準備するよとのメッセージから、人間のはかなさに対応する神のみことばへの確かさへのメッセージとなっている。聖書の中で、人間が草のはかなさ、弱さにたとえられている箇所は多い(37 : 27、 51 : 12、 詩 37 : 2、 90 : 5、 103 : 15、 129 : 6)。いぶき (𐤀𐤋𐤅𐤁) は、「息」であると共に、「風」の意味もある。砂漠の熱風が東から吹いてくると、草はたちまち 枯れる (詩 103 : 16)。草のようにはかない人間の生命に対比されるのは、神ご自身ではなく、神のことは (8)である。神はご自身を隠しておられ、だれも近づくことはできない(出 33 : 20、イザ 45 : 15、ヨハ 1 : 18、 テモテ 6 : 16)。しかし、みことばにおいてご自身を啓示しておられるので、人は神のことはにすべてをかけることができる。

こうして 1-8 節で、罪の赦しの福音、それを受け入れるための準備、聖書論と、三者が統

一的に慰めのメッセージを構成している。それは、単なるバビロン捕囚からの解放期の自由の鐘ではなく、神の一方的な罪の赦しの宣言、それを受け入れるようにとの招き、その確かさが神のことばの中にだけ基礎付けられているとの保証から成る慰めのメッセージであり、形式的にも内容的にも、6章の召命体験と表裏の関係になっている。その大枠が設定され理解されるなら、バビロン捕囚からの解放も、預言の一部として含まれていたと考えても差し支えない。

9節 シオンに良い知らせを伝える者よ。

高い山に登れ。

エルサレムに良い知らせを伝える者よ。

力の限り声をあげよ。

声をあげよ。恐れるな。

ユダの町々に言え。

「見よ。あなたがたの神を。」

עַל הַר־נֹבֶה עֲלֵי־לָךְ מִבְּשֵׂרֶת צִיּוֹן הָרִימִי ^{WTT} Isaiah 40:9

בְּפֶתַח קוֹלֶךָ מִבְּשֵׂרֶת יְרוּשָׁלַם הָרִימִי אֶל־תִּירְאִי אִמְרִי

לְעָרֵי יְהוּדָה הִנֵּה אֱלֹהֵיכֶם:

10節 見よ。神である主は力をもって来られ、

その御腕で統べ治める。

見よ。その報いは主とともにあり、

その報酬は主の前にある。

הִנֵּה אֲדֹנָי יְהוִה בְּחֶזֶק יְבוּא וְזָרְעוֹ מִזְשָׁלָה לָּו ^{WTT} Isaiah 40:10

הִנֵּה שְׂכָרוֹ אִתּוֹ וּפְעֻלָּתוֹ לִפְנֵינוּ:

11節 主は羊飼いのように、その群れを飼い、

御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、

乳を飲ませる羊を優しく導く。

כְּרֹעֶה עֲדָרוֹ יִרְעֶה בְּזָרְעוֹ יִקְבֹּץ טְלָאִים ^{WTT} Isaiah 40:11

וּבְחִיקוֹ יִשָּׂא עֲלוֹת יְנֵהֶל: ם

序曲「慰めのメッセージ」の締めくくりである。神が慰めをもって臨在されるという良

いおとずれを、爆発的に全地に向かって呼ばれる。良い知らせを伝える者は、一語で、ハバーサル(「良い知らせを伝える」の意味。使者は走って伝えに行く。サム 18:19)の分詞形。福音の使信を伝える人の意味(52:7、詩 68:11)。ここでは当然、終末的な意味で用いられており、バビロン捕囚からの解放の知らせではない。恐れるなは、出エジプト伝承が考えられている(7:4 注解)。

福音宣教の内容は、3つの見よによって示される。それは、神ご自身である。第一の見よでは、その神があなたがたの神であることが示される。また、第二の見よでは、大能者としての姿、第三の見よでは、いつくしみに満ちた愛の神の姿が示され、前者が、ユダのすべての敵を打ち破る勇者として描かれているとすれば、後者は、贖われた民を導く羊飼いと描かれている(詩 23、エレ 31:10、エゼ 34:12-15、31、ミカ 5:4)。報いと報酬は同義語であり、普通は労働者に対する報酬という意味であるが(創 30:28、32、申 15:18)、償いの意味もある(出 22:14)。ここでは、神ご自身がご自分の義に対する償いを用意しておいでになるということで、やはり 53 章への伏線があると見なければならぬ。